



経営(継承)のツボ

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

精鞭一撻

高知が生んだ「日本の植物分類学の父」牧野富太郎博士の業績を顕彰するため、博士逝去の翌年、1958(昭和33)年4月に高知市の五台山に開園した高知県立牧野

ただいた。入館するや目に留まったのは、牧野博士が青年時代(18〜20歳)の頃に記した15項目に及ぶ勉強心得「精鞭一撻*1」である。

- ① 忍耐を要す
- ② 精密を要す
- ③ 草木の博覧を要す

一樹百穫なる者は人なり

転期に立つ経営の視座^③

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人材創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com

ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

植物園。起伏を活かした約6haの園地には、博士ゆかりの野生植物など約3000種類が四季を彩っており、園地面積を拡張した99(平成11)年には植物に関する教育普及と研究の拠点となる「牧野富太郎記念館」が開設された。当地から主宰塾に通う塾生に案内してい

- ④ 書籍の博覧を要す
- ⑤ 植学に関係ある学科は皆学ぶを要す
- ⑥ 洋書を講ずるを要す
- ⑦ 当に画図を引くを学ぶべし
- ⑧ 宜しく師を要すべし
- ⑨ 悟財者は植物学たるを得ず
- ⑩ 跋涉の労を厭ふなれ

⑪ 植物園を有するを要す

⑫ 博く交を同士に結ぶ可し

⑬ 逆言を察するを要す

⑭ 書を家とせずして友とすべし

⑮ 造物主あるを信するなれ

勉強心得を青年期に確立し、独学によって学術的成果を残した日本の植物学の父が「精鞭一撻ノート」に綴った一部を紐解いた*2。

うかうか三十 きよろきよ四十

①は、何事においてもそうだが、その詳細は、少し見てわかるようなものではない。行き詰まっても、耐え忍んで勉強を続けなさい。

②は、観察、実践、比較、記載、作成などの不明な点、不明瞭な点があるのをそのままにしてはいけない。いい加減ですますことがないように、とことんまで精密を心がけること。

③は、草木を多量に観察すること。少しの草木で済まそうとすれば、知識も偏り、不十分な成果しか上げられない。

⑧は、植物について疑問がある場合、植物だけで答えを得ることはできない。誰か先生について聞く以外ない。だが、一人の先生じ

やダメ。先生と仰ぐに年の上下は関係ない。わからないことを聞く場合、年下の者に聞いては恥だと思ふようでは、疑問を解くことは一生涯不可能である。

⑫は、植物を学ぶ人を求めて友人にすること。遠い近いも、年令の上下も関係ない。お互いに知識を与えあうことで知識の偏りを防ぎ、広い知識を身につけられる。

⑭は、本は読まなければならぬ。だが、書かれていないことがすべて正しいわけではない。間違っているものもある。書かれていることを信じてばかりいるのは、その本のなかに安住し、自分の学問を延ばす可能性を失う。新説をたてることも不可能となる。過去の学者のあげた成果を批判し、誤りを正してこそ、学問の未来に利する。書物(とその著者)は、自分と対等の立場にある友人であると思うこと。

中国古典の『管子』には、「一樹百穫なる者は人なり(大計を成功させるには人材の育成が必要である)」とある。

一撻は、介護と同じ。
介護人材の育成を「うかうか三十きよきよ四十」で終わらぬよう一樹百穫の芽を育みたい。

*1: 精鞭とは中国の故事。神農が赤い鞭で草をはらい、それをなめて役に立つ植物かどうか確かめたという伝説に由来。一撻とは、大きな目標に対して自身を叱咤激励する言葉 *2: 高知県立牧野植物園現代語訳に基づいて加筆